

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 9 月 11 日現在

機関番号：33901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370717

研究課題名(和文) 英語が苦手な学習者のためのグローバル人材育成プログラム開発と効果に関する予備調査

研究課題名(英文) The study of how to develop a teaching program for global human resources development for students with low English proficiency and a preliminary study of the effect

研究代表者

安達 理恵 (ADACHI, RIE)

愛知大学・地域政策学部・准教授

研究者番号：70574052

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英語が苦手な学生を対象に、最低限の英語力に加え、多様な異文化状況で自律的に対応する力と、異文化の他者と積極的に関係を構築できる人間性や協調性を兼ね備えたバランスの取れたグローバル人材育成のための教育プログラムを開発することを目的とした。その結果、かなり英語が苦手な場合は学習の必要性を感じていない一方、企業を対象とする調査でも、高い英語力よりも、異文化間状況において積極的に対応していく力が求められ、それに応じた人間性を育成することも必要とわかった。今後は、英語に特化せず多様な異文化間状況に必要な力を育成するCLIL(内容言語統合型学習)が重要と考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the students who do not have a positive attitude toward learning English and how to develop a teaching program for global human resources development for the students. The first aim of the study was how to grow basic communication skills, secondly, how to develop a capacity to handle in different intercultural situations, and thirdly, how to foster a rich humanity and a cooperative attitude and develop the students who can apply in a globalized world. The study found that teachers should not only encourage students to develop foreign language ability but also have them more interest in multiple languages and cultures and nurture intercultural attitudes with a global mindset. In addition, a multicultural perspective will also be required of students since more and more companies expand their business into Southeast Asian countries. It also suggested that introducing CLIL (Content and Language Integrated Learning) into Japanese education would be desirable.

研究分野：外国語教育、異文化間コミュニケーション

キーワード：グローバル人材 海外留学 異文化間コミュニケーション 異文化間能力 リメディアル教育 コミュニケーション力 異文化間交流 CLIL

1. 研究開始当初の背景

急速に進むグローバル化社会に対応する人材の育成が急務とされているが、現在は主に英語スキル向上を目的とするエリート養成教育が大規模大学を中心に進められている。しかしグローバル化は、さまざまな業種で国内外を問わず進むことが明白であり、中・小規模大学においてもグローバル化社会で生き抜くことができる人材の育成が求められている。また、グローバル人材には、英語力以外にどのような資質が必要かについてこれまでほとんど研究されてはいない。そこで本研究は、英語が苦手な学生を対象にどのような力が必要かを検討することにした。

2. 研究の目的

本研究は、英語が苦手な学生を対象に、最低限の英語力に加え、多様な異文化状況で自律的に対応する力と、異文化の他者と積極的に関係を構築できる人間性や協調性を兼ね備えたバランスの取れたグローバル人材育成のための教育プログラムを開発することを目的とした。

3. 研究の方法

研究方法としては、以下のような教育プログラムを考えることを目標とし、最終年度ではその教育プログラムの効果を検証する予備調査の検討も予定していた。

異文化の人と積極的なコミュニケーションを取る態度を育成する指導法

効果的な異文化間交流プログラムの策定

苦手とする学生に最低限の英語力獲得を目指すリメディアル教材と指導法の検討

自律した学習者を育てる異文化理解インターンシッププログラムの構築

これらの教育・指導方法を検証する研究

4. 研究成果

(1)異文化の人と積極的なコミュニケーションを取る態度を育成する指導法

以下のようなテーマの研究会やWSに参加した。また自分でも研究会を開催し、その際にアンケートを取るなどして参加者からも意見を聞いた。

・RT (Readers' Theater) : 群読やそれを英語教育に生かす実践方法

・英語絵本の読み聞かせ及び絵本を通じた劇活動のワークショップ

・子ども向けのインプロ入門WS

これらのようないずれも身体を使った活動を導入することの教育的効果として、五感を通して学ぶので外国語も覚えやすく(脳のより多様な部分が活性化)、劇発表など、完成までに相当エネルギーも必要な場合は、モチベーション維持が大変だが、成功した際の達成感と自己自信に大いに寄与することが分かった。また、Gardner, H.の多重知能理論(2003)による人の持つ8つの知能の視点からも、言語的知能だけでなく多様な力を発揮で

きる場のある方が、より多くの児童に活躍の場を提供できると考えられる。

(2)効果的な異文化間交流プログラムの策定

まず学生に、多様な国の人々との交流の機会を提供することを目指した。そこで提携先の模索のためマレーシアの大学を訪問し、小学校の英語教育も観察した。しかし大学を異動することになったため、提携に至らず、個人留学の機会を提供するだけになった。28年度からは、新たな大学で、異文化間交流プログラムについて検討を始めたが、単位互換制度等はすでに確立しているが、留学する日本人学生も外国からの留学生も少ないこともあり、外国人学生と共に学ぶ教育プログラムを開発するには至らなかった。但し、授業外の地域貢献活動として留学生と日本人学生が協力して異文化理解を地域に広める活動の支援を始めた。

また、前任校で行った学生の海外留学意識に関する調査では、分析の結果、在住外国人に対する意識がアジア言語学習態度に影響し、さらにそれが異文化コミュニケーション態度に影響し留学意識にも関係する、これにより異文化間コミュニケーション能力を発達するには、在住外国人やアジア言語学習への関心を高め、自文化中心意識から解放することが必要と考えられた。

加えて、同様に前任校の学生の主な就職先となる企業にグローバル動向に関する調査を行った結果、企業の業務相手はアジア諸国が多い、新入社員に対して求める英語力はそれほど高くない、ノンバーバルのコミュニケーション力や他者との協力的態度も比較的期待されている、となった。したがってやはりグローバル人材育成には、英語力のみならず、異文化や異言語に対する積極性や柔軟な態度の育成が必要と結論付けられた。

(3)苦手とする学生に最低限の英語力獲得を目指すリメディアル教材と指導法

かなり苦手な学生の英語に対する意識を探るためインタビュー調査を行った結果、コミュニケーション型な授業を求めている、英語学習の必然性を感じていない、ということが分かった。そして協同的なコミュニケーション活動の導入、異文化を実体験する、OBなどから仕事での実際の英語使用の話などを聞くなどして必要性を具象化する、などが必要であると考えられた。但し、自閉症などの発達障害の可能性がある場合は、協同学習をする前に学習者との人間関係構築や各学習者に合わせたきめ細かなサポートも必要であると考えられた。

また学習の初期段階での読みのつまずき、特に英語の音韻意識を育成するには、やはり五感を通して音と単語を学ぶことができ、発達障害の子どもの指導について考慮したシンセティック・フォニックスの一つ、ジョリーフォニックスも有効と考えられた。

(4) 自律した学習者を育てる異文化理解インターンシッププログラムの構築

多様な方策を検討したものの海外でのインターンシッププログラムの構築は英語力が低いと困難と考えられた。現勤務校でも、海外でのインターンシップを体験できるほど英語力のある学生は少ない事、また組織的な課題もあり実施が難しい面があった。今後、大学の組織と連携して可能性を模索する。

(5) グローバル人材の育成のために必要な教育プログラムとは

本研究は、上記で述べたように、研究期間を通して、最低限の英語力、多様な異文化状況で自律的に対応する力、異文化の他者と積極的に関係を構築できる人間性や協調性を兼ね備えた、バランスの取れたグローバル人材育成のための教育プログラムを開発することを目的とし、一定の成果を得られた。但し、異文化理解インターンシッププログラムの構築など組織上の課題もあって到達できなかったものもあり、また当初、最終年度ではその教育プログラムの効果の検証を予定していたが、予備調査までは至らなかった。

本研究で対象とした、英語が苦手な学生の場合、英語や数学のような積み重ねが必要な科目における特に学習開始時期の躓きは、その後もずっと影響すると考えられた。しかし、現行の教育システムでは、高校は到達すると想定されている学力に必ずしも達していても卒業でき、また大学も受け入れている現状がある。

したがって、特に学習初期段階においては、英語については丁寧な指導が必要であり、加えてグローバル人材に必要な資質、すなわち、異文化の人と積極的なコミュニケーションを取る態度を育成する、身体を使った指導も必要であろう。また異文化間交流プログラムとして、英語のみならず、多様な外国語やさまざまな文化、異文化の人々に対する積極性や柔軟な態度の育成を育成するための交流教育プログラムを開発することも、必要と考えられる。

そして、英語が苦手な学習者集団には、協同性を育む協同学習を導入すると同時に、発達障害の学生も存在する可能性があるので、学習者との人間関係構築や各学習者に合わせたきめ細かなサポートも必要であると考えられた。

(6) 今後の研究

本研究の継続として現在は、CLIL (内容言語統合型学習) に関する研究を始めている。CLIL とは、ヨーロッパで広まっている内容言語統合型学習法で、他教科学習を通して外国語も学ぶアプローチである。単に知識を与える学習法ではなく、生徒が能動的に考えたり、グループで話しあったりすることを重視

し、加えて一つのテーマ (プロジェクト) について体系的に多様な指導方法 (絵を描く、歌を歌う、身体で表現する、グループで課題に取り組む、寸劇をする) を用いることから、英語が苦手な学習者も内容 (content) を目的とした活動によって、意識なく自然に外国語に親しむことができる。

イタリアでの CLIL 授業見学を通して、英語のみを目的とせず児童の多様な力を育成しながら異文化に対する関心や協同性を育成するアクティブラーニング型の授業を学ぶことができた。また CLIL は、ヨーロッパでの複言語・複文化主義、およびシチズンシップ教育の考え (Byram, 2012) と合致していると考えられた。そこで、2016 年度から研究成果の一部公開および一般への学習成果発表会として、「CLIL とアクティブラーニング研究会」を定期的に開催した (2016 年 9 月、2017 年 3 月、2017 年 6 月の計 3 回) そして、言語面などの知識や技能のみならず、思考力及び、異質なものに対する尊重意識を育成する授業のあり方を考察した。また、このような資質も、学習の初期段階 (年少者) から育成することが重要と考えられる。

研究会の参加者から大いに役立ったなどのコメントを毎回頂くが、本研究の意義を改めて考える例として、以下のようなものを頂いた。

「異文化のお話しは子どもたちにきちんと伝えていきたい、その深い意味も。私の父が勤めていた会社にはイスラム教徒の従業員の方たちがいたが、会社のバーベキューパーティーがあった時に、豚肉が食べられないので牛肉や鶏肉を食べていた。しかし、日本人労働者のひとりがいたずら心で豚肉を牛肉と偽って彼らに食べさせてしまい、「それほんとうは豚肉だよ。」と言った途端、それを食べてしまった人はトイレに急行、指を口に入れて必死に涙を流しながら頑張って吐き出していたそうだ。知識としては持っていないが、その本質が理解できていない。悲しいことである。」(一部簡略化)

この例からも、真のグローバル人材を育成するには、英語力育成を目的とするだけでは不十分な事は明らかだろう。まずは異なる価値をもった人々と関係性を築こうとする態度、そして、学習初期段階では、英語使用の必要性を実感できる活動体験をすること、加えて多様な異文化状況で自律的に対応でき、異文化の相手を尊重できる、グローバルマインドセットをもった人材の育成について今後考えていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 16 件)

Adachi, R. (2017) Japanese engineering students' attitudes toward studying abroad

and living with other cultures in an increasingly globalized world, JACETSIG-ELE Journal Language Teacher Education Vol.4 No.2 (掲載予定) (査読有) 安達理恵 (2017) イタリアの CLIL から学ぶ小学校での外国語活動における指導法, JACET 教育問題研究会 言語教師教育 Vol.4 No.1, pp.31 - 42. (査読有) Christiane Lütge. 栗原文子・安達理恵 翻訳. (2017) 英語教育におけるグローバル市民教育 - ドイツの視点 - JACET 教育問題研究会 言語教師教育 Vol.4 No.1, pp.1 - 10. 北野ゆき, 阿部志乃, 安達理恵 (2017) 絵本 Handa's Surprise による異文化理解と思考力を高める CLIL 指導法, 語学教育エキスポ 2017 予稿集, pp. 32-35. 長田恵理・安達理恵 (2016). 「マレーシアの授業観察から学ぶ小学校英語教育」国学院大学人間開発学研究 8 号, pp.151-170. Adachi, R. & Sakai, S. (2016). A study on globalized human resources based on the necessity of small and medium-sized manufacturing companies. JACET 教育問題研究会 言語教師教育 Vol.3 No.2 pp.97 - 112. (査読有) 安達理恵・酒井志延 (2016) 中小企業が求めるグローバル人材育成教育に関する事例調査 - 地方製造業を中心に. JACET 問題教育研究会 言語教師教育 Vol.3 No.1, pp.121-132. (査読有) 安達理恵 (2016) 異文化理解のための CLIL 活動ワークショップ—水をテーマに, 語学教育エキスポ 2016 予稿集, p.16. 安達理恵 (2016) 大学での英語習熟度下位クラスのための 授業改善ワークショップ, 語学教育エキスポ 2016 予稿集, p.73. 酒井志延 (2016) ヨーロッパ統合を支える協同学習 (ヨーロッパ統合に関する総合的研究: その統合の理念、その課題、そして東アジア地域への示唆), 国府台経済研究 26(1), pp.107-123. Adachi, R. (2015) Motivation and communicative attitudes among Japanese EFL pupils. Indonesian Journal of Applied Linguistics 5(1), pp.1-9. (査読有) <http://ejournal.upi.edu/index.php/IJAL/article/view/824> 安達理恵 (2015) 地方私立大学での国際化に対する教職員態度の研究, グローバル人材育成教育研究 第 2 巻第 1 号, pp. 9-19. (査読有) <http://www.j-agce.org/wp-content/uploads/2016/01/2015-1.pdf> 安達理恵・牧野真貴 (2015) 英語が苦手な学習者の質的・量的原因調査, 語学教育エキスポ 2015 予稿集, pp. 107-108. 相澤一美・酒井志延・安達理恵 (2014)

外国語活動の重要語と Hi, friends! の使用語の比較. 東京電機大学総合文化研究 (12), pp.3-7.

Adachi, R., Sakai, S., and Aizawa, K. (2014) A study on Japanese elementary school teachers' perceptions of foreign language activities, JACET SIG-ELE Journal Language Teacher Education, Vol.1, No.2, pp.50-69. (査読有)

酒井志延 (2014) グローバル化のための語学プログラムを担当する日本人大学教員の意識に関する研究 (特集 グローバル人材の育成を考える: 日本におけるリメディアル教育から大学教育全体の視点まで) リメディアル教育研究 9(1), pp.57-68.

[学会発表] (計 18 件)

Adachi, R. (2017) Japanese students' attitudes toward other cultures and a globalized world. The 52nd RELC International Conference, Mar. 14 The Regional Language Centre, SINGAPORE.

Adachi, R. (2016) "The possibility of practicing CLIL in Japanese elementary schools" JALT Toyohashi, Dec. 18 Aichi university 招待講演

安達理恵 (2016) 「イタリアの CLIL から学ぶ外国語活動における指導法とワークショップ」春日井市教職員研究会第 42 回春日井市教職員研究会 10 月 5 日 (水) 春日井市福祉センター 招待講演

安達理恵 (2016) 「異文化間能力育成のための小学校外国語教育—EU(イタリア)の CLIL 授業からの示唆」中山夏恵、栗原文子、大崎さつき 4 名によるシンポジウム「小学校英語教育における異文化間能力育成の重要性と指導の観点」第 55 回 JACET 国際大会 9 月 1 日 (木) 北星学園大学

安達理恵 (2016) 「イタリアの CLIL から学ぶ外国語活動における指導法」全国英語教育学会第 42 回埼玉研究大会 全国英語教育学会 8 月 20 日 (金) 独協大学

Adachi, R. (2016) "The possibility of practicing CLIL in Japanese elementary schools: Problems and expectations," Asia TEFL 2016, Jul. 1 The Far Eastern Federal University, Vladivostok, Russia

安達理恵 (2016) イタリア CLIL 授業観察から考える日本の外国語教育、課題別研究プロジェクト: 「言語習得からみる小中連携の英語指導—文の仕組みへの気づき・音声から文字へ・CLIL—」代表: 柏木賀津子ほか 9 名, 第 46 回中部地区英語教育学会 三重大会 中部地区英語教育学会 6 月 25 日 鈴鹿医療科学大学白子キャンパス

安達理恵 (2016) 小学校での異文化間能力育成の必要性和 CLIL, 国際研究集会

3月29日 京都大学 招待講演
安達理恵 (2016) 異文化理解のための
CLIL 活動ワークショップー水をテーマ
に 語学教育エキスポ2016 3月6日 早
稲田大学
安達理恵 (2016) 大学での英語習熟度下
位クラスのための授業改善ワークショッ
プ 語学教育エキスポ2016 3月6日 早
稲田大学,
Adachi, R. & Sakai, S. (2015) Which will be
more necessary for Japanese university
students, English proficiency or intercultural
communicative competence? From a case
study at a Japanese technological university,
BAAL: British Association for Applied
Linguistics. Sep. 3 Aston University,
Birmingham, UK,
安達理恵・長田恵理 (2015) 「多民族国家
マレーシアの小学校外国語教育ー日本の
英語教育への示唆ー」JES 小学校英語教
育学会広島大会 7月26日 広島大学
Adachi, R. (2015) A case study of Japanese
college students' attitudes toward studying
abroad, foreign languages, and foreign
residents, and their identity” Study abroad
The Culture of Study Abroad for Second
Languages. AILA-ReN on study abroad
research. Jul. 6 Saint Mary's University,
Halifax, Canada,
安達理恵ほか 2名(2015) 課題別研究プ
ロジェクト:協同学習を取り入れた英語
授業「協同学習を取り入れたリメディ
アル学習者対象の英語授業」第45回中部地
区英語教育学会 和歌山大会 6月27日
和歌山大学
Adachi, R. (2015) Is English proficiency
integral for Japanese students to live in a
globalized society? ICCed (Intercultural
Competence in Communication and
Education) 2015, the Faculty of Modern
Languages and Communication, Apr. 8
University Putra Malaysia university
安達理恵・酒井志延 (2014) グローバル
化時代の英語・コミュニケーション教育
- 大学教員と企業の聞き取り調査から,
第45回中部地区英語教育学会 6月22日
山梨大学
Adachi, R. (2014) A case study of Japanese
college students' attitudes toward studying
abroad and learning English -In order to
adapt to a globalized world, AILA 2014
World Congress, Aug. 10 Brisbane
Convention & Exhibition Center, Australia
Adachi, R. (2014) A case study of Japanese
college students' attitudes toward Foreign
residents in Japan and Learning English -
What is a global mindset? The 54th national
convention of LET, Aug. 5 Fukuoka
university

〔図書〕(計3件)

藤原孝章 (2016) 『グローバル教育の内容
編成に関する研究ーグローバル・シティズ
ンシップの育成をめざして』風間書房(東
京)全393頁

Adachi, R. (2015) CHAPTER 18 The
challenges in achieving globalization
through English language learning in Japan: A
focus on elementary schools. In C. Gitsaki &
T. Alexiou (Eds.). Current Trends in
Second/Foreign Language Teaching and
Teacher Education: Research Perspectives.
(pp.93-109). Cambridge Scholars Publishing.
(査読有)

藤原孝章 (2015) 『国際理解教育ハンドブ
ック グローバル・シティズンシップを育
む』国際理解教育学会編(共編者)明石
書店(東京)全257頁 担当部分 3-4、
8-15、32頁

〔その他〕

(研究会開催) CLIL とアクティブラーニ
ング研究会第3回 2017年6月3日 愛
知大学名古屋校舎

(研究会開催) CLIL とアクティブラーニ
ング研究会第2回 2016年3月4日 愛
知大学名古屋校舎

(研究会開催) CLIL とアクティブラーニ
ング研究会第1回 2016年9月10日 愛
知大学名古屋校舎

(報告書) 安達理恵 (2015) 教科化の前に
考えるー目的と関心、指導者、内容 犬塚
章夫・安達理恵・加藤拓由 問題別討論会
「小学校英語、どんな教科化にすべき
か?」中部地区英語教育学会紀要第44号,
p.267.

(書評) 安達理恵 (2015) 『世界と日本の
小学校の英語教育』書評 JACET 問題教
育研究会会誌 『言語教師教育』第3巻1
号, pp.179-181.

(書評) 安達理恵 (2015) 『日・英談話ス
タイルの対照研究ー英語コミュニケーション
教育への応用』書評 JACET 中部二
ユースターNo.35, pp.8-9.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安達 理恵 (ADACHI, Rie)
愛知大学・地域政策学部・准教授
研究者番号: 70574052

(2) 連携研究者

藤原 孝章 (FUJIWARA, Takaaki)
同志社女子大学・現代社会学部・教授
研究者番号: 70313583

酒井 志延 (SAKAI, Shien)
千葉商科大学・商経学部・教授
研究者番号: 30289780